

仏女新聞

仏女新聞社 飯島可琳

「快慶展」特集 @奈良国立博物館

人々と極楽浄土

後白河法皇が編んだ「梁塵秘抄」に次のような歌がある。

極楽浄土のめでたさは

一つもあだなることぞなき

吹く風立つ波鳥もみな

妙なる法をぞ唱ふなる

(極楽浄土のめでたさといったら、何一つ無駄なことなどないのだ。吹く風、池に立つ波、鳥のさえずり、すべてがみな尊い法文を唱えていることだよ。)

ちくま学芸文庫『梁塵秘抄』(二〇一四年)

* * *

まだ見ぬ極楽浄土を思い描いた歌である。その歌が法皇の心に届き、文字に遺された。当時の人にとって極楽浄土の存在は大きく、揺るぎないものであったはずだ。実際、阿弥陀信仰は当時のブームであったようだし、快慶も阿弥陀如来を信仰した人々のうちの一人であった。

阿弥陀如来坐像 耕三寺

印象に残る阿弥陀如来坐像があらわれた。広島にある耕三寺の仏像である。もとは伊豆山権現の常行三昧堂の本尊であるそうだ。悠悠とした丈六の阿弥陀如来坐像が席卷した国風文化とは、趣が異なっている。菩薩形の阿弥陀如来坐像の高い髻や両肩を覆う衣は宋の秀麗な雰囲気を漂わせる。快慶は重源と志を同じくして同時代を生きた。三度宋を訪れたと言う重源は、経典等を持ち帰っただけでなく、宋の秀麗な雰囲気をまとって帰ってきたとされている。快慶がその影響を受けなかったとは考えにくい。快慶の造形に宋的なものがあらわれるのはむしろ自然なことなのかも知れない。宋風の仏像と言えば、『鎌倉の仏像展』(奈良国立博物館、二〇一四年)に出陳された浄光明寺の観音菩薩坐像が思い浮かぶ。身体はゆったりとくつろいで、視線は斜め下に向けられている。細いたおやかな指が美しい。宋の仏画にも、あらゆるものを包み込むような母性を感じることがある。



快慶の阿弥陀如来坐像はその意味では宋的でない。

緊張感を伴い、あくまでも「仏」という秩序を保っている感だ。

この坐像が醸す控えめなエキゾチシズムは、重源を介して間接的に宋風文化に触れたためであるのだろうか。いや、そのような中途半端なものであって欲しくない。宋風文化の消化吸収によって創造された快慶的表現なのではないか。

弥勒菩薩立像 ポストン美術館

四年前の『ポストン美術館展』で快慶の「弥勒菩薩立像」に会った。当時小学四年生だった私には、その瞳が潤んでいるように見えた。廃仏毀釈の荒波にもまれ、ふるさと奈良を離れることになった自らの運命を嘆いているのだと解釈した。ここまで人間の瞳のように潤んでいる玉眼を見たことがなかったからだ。

そんな弥勒菩薩立像がふるさとの奈良に、しかも実家である興福寺の隣にある奈良国立博物館に帰ってきた。四年ぶりに仰ぐお顔は、帰省でくつろいでいるように、そして健やかで澁刺としているように思えた。

菩薩立像の左腕に目がとまった。正対すると気にならないのだが、尊像の左側に回り込んで見ると不思議な印象がある。水瓶を持つ左肘の角度がきつく、菩薩の腕に込められた力が見えるかのようだ。重みのあるものを掲げれば、腕の筋肉の緊張が手のひらにも及ぶはずだ。しかし、菩薩立像の左手首から先は、重みを支えているように見えない。力が抜けたしなやかな曲線だ。肩にかかる天衣が、ゆ

ったりと風に吹かれているかのように広がっている。

快慶の脳内にある理想的な仏像の造形を集約して一つの身体で表現したひとつの典型が、この菩薩立像のような姿になるのではないかと私は思う。衆生を救済しようとするおらかな意志と、人々の信仰の対象となり得る品格を併せ持つ姿だ。

おそらく、快慶は菩薩立像に人々が仏像に求める要素を詰め込んだ一方で、快慶自身の仏像観に基づく造形も盛り込んだはずだ。両者はもしかするとうまく調和せずにせめぎ合い、仏像の身体に一種の緊張感を漂わせていたかもしれない。仮にそうであったとしても、力量ある快慶のことだから、工夫を凝らしてその緊張をといっていたことだろう。快慶は、自らの仏像観の表現対象として、衣の形状をより重視することで全体のバランスを取ろうと試みたのではないかと考えてくる。きっと晩年の造形に快慶の力量が見えてくるはずだ。

このような幾つかの想像を、会場で確認してみたいと思うのである。十分に快慶展を堪能できたら、秋に東博で催される運慶展が更に魅力を増すだろう。

「快慶 日本を魅了した仏のかたち」

於・奈良国立博物館

開催：四月八日[土]～六月四日[日]

詳しくは左記サイトでご確認ください。

<http://www.ytv.co.jp/kaikei>